に歴史學の批判に對しても十分耐へ得るものでなければならぬ。氏がその專門的領域を越えて歴史事實に對しても廣く關心を拂はれた所以も恐らく、右の如き自覺に出たものであらうと思ふ。恐らくこれだけの具體的內容をもつ哲學はなかつたと言つてよい。けれども本書は飽く迄世界史の哲學であつて世界史そのものではない。特殊的世界史といはれヨーロッパ史、支那史、印度史、日本史が果して皆特殊的世界史であるか、又もしさうなれば如何なる具體的內容をもつか、それぞれの特殊的世界史の時代區分は一樣に古代・中世・近世の三區分であるか否か、それ等は尙それぞれの特殊的世界の歴史家に委ねらるべき問題である。本書が歴史家に提出してゐる問題は極めて廣汎である。徒らに揚足をとることをせず、歴史家自ら右の如き問題を問題とすることによつて、自らを世界史的立場に止揚すべきであらう。（岩波書店發行　定價四圓五拾錢）（井上智勇）

米國東洋政策の史的考察

高木八尺著

「コロンブスが發見したアメリカは地理上の新世界であつたが、今日それは歴史上に新世界であり、吾人はそれを再發見せねばならぬ」とは旣に十五年の昔、シーグフリードが其の名著「現代の合衆國」に於て喝破した訓言であるが、これこそは正に今日其の儘に吾々にとつても眞理である。少くも十八世紀の末葉迄はヨーロッパの子供として文字通り「新世界」であつたアメリカが、十九世紀と云ふエクスパンションの一世紀を經て、身長豐かな若人となつた。青年アメリカを無視して現代世界史の問題は究めらるべくもない。シーグフリードの右の名著が英譯されて、「アメリカ青年に達す」と銘打たれたのは、意味頗る深長なものがあると云はねばならない。

然らば、「現代の合衆國」とは如何なる合衆國であるか。近代ヨーロッパの子アメリカ、都市國家も封建社會も持たなかつたアメリカ、に近代若くは現代と云ふ時代は何時に設定されるのであるか。吾人は之を十九世紀末に認め得ると思ふ。十九世紀末と云ふ時代、それはターナーをして云はしむれば、正に米國史の第二期に入るべき轉機であり、對內的には、過去數百年に亙りアメリカ史を織りなして來た重要契機の一たるフロンティアの消失、「經濟革命」を經たる工業國家への躍進、勞資の對立、不平黨擡頭、と云ふ新現象を生ぜしめ、對外的には、米西戰爭を契機として世界政策に入り、東亞に若武者の名乘りをあげしめた時代である。從來西へ〳〵と夕日に向つて斧を振り拓き來つたフロンティアの前進が、今や海を渡つて更に西進しつゝある。曾てのフロンティアの敵は未開のインディアンズであつたが、今日のフロンティアの敵は歴史を誇る諸民族、特に日本である。「英國的平和」より所謂「五・五・三」の英國の世界第二位への讓步、アングロサクソン共同體、と云ふ現代世界史の神祕も亦、十九世紀の暮鐘の鳴る時に胚胎するものと考へられ、此の時代に對する吾人の關心は彌が上にも高まらざるをえないのである。

今回、東京帝國大學教授高木八尺氏が小野塚先生奬勵資金による特別講義を基として公にされた「米國東洋政策の史的考察」は、アメリカの所謂「現代」の探究に出發されてゐる。卽ち、Weltmacht として "Open Policy" を振翳し東洋に進軍したアメリカを卽ち十九世紀末から大東亞戰爭勃發に至る迄のアメリカの東洋政策を、史的に考察されてゐるのである。著者は人も知る斯界の權威。吾々は「米國政治史序說」其の他「國家學會雜誌」に於て夙に氏の學風に接し、多大の示唆を得て敬服してゐる者であるが、此の度、吾人の關心とする「現代の合衆國」の性格に關し長年研鑽の一端を發表されたことは洵に喜び深いものがあるのである。氏の述べられるところ、吾々がシーグフリードに見るが如き線の鋭さ、華々しさはないが、地味にして正確なる叙述は自らまた大家の風を感ぜしめる。但、淺學不才の吾々をして強ひて之に批判を加へしめるならば、氏は矢張り政治學者であると云ふ旣定の事實である、從つて、歷史家として此の書物に接するならば、些かの物足らなさを感ぜざるをえない、と云ふことである。問題は專ら題名にある如く政策の歷史である。如何なる必然が如何なる偶然と相寄り相反しつゝ歷史的世界を形成して行くかと云ふことに關しては些か不十分な點があると思惟せられる。門戶解放政策が何が故に取られねばならなかつたか。支那に於ける事態の紛糾は勿論のこと、アメリカ國內の情勢、マッキンレー、ヘイ等の歷史的個人の問題、が如何に歷史に働いてゐるか、(而も此のことこそ歷史家がアメリカの東洋政策を論ずる場合に第一に注目しなければならぬことである)等に就いては餘り明確な論を得てゐない。然しながら、之は難ずるが無理である。氏の主眼は飽く迄アメリカの東洋政策の史的考察であるからである。

吾々は徒らに喋々とするを止めねばならない。これだけの纔かの紙數で(百十二頁)、これだけの多くの內容を盛り、それに依つて一應アメリカの東洋政策の今日迄の動きを、所謂「現代の合衆國」の一貌を、指示してくれたことに對し、吾々は深甚の感謝を捧げねばなるまい。

今日、アメリカの研究は學問內的たると外的たるとを問はず、須臾も之を忽にするを許されぬ重要事である。そして、此の太平洋を挾んで相對峙する日米兩國の動きの中に世界幾十億の人民の生死が賭けられてゐると云ふことに深く思ひを致し、吾々アメリカ研究者は一歩々々を堅く踏まんことを肝に銘じなければならない。「歷史上に於ても新世界であるアメリカの探究」こそシーグフリードが喝破し、今日、吾々が亦その儘に受容れて以て訓言とすべきものなることを重ねて强調しなければならない。そして、徒らに山積される二束三文の見切品ではなくて、アメリカ風とは異つた、量より質の、當著の如き豐かなる貯へから品定めして徐々に出される上等品が今後益々公にされんことを切に希念しつゝ紹介の筆を擱く次第である。(岩波書店發行　定價壹圓)　(菅島晃)

西洋中世史新講

中川一男著